
甘くて強くてまけちゃいそう。 2

梓衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘くて強くてまけちゃいそう。 2

【Nコード】

N2966K

【作者名】

梓衣

【あらすじ】

「甘くて強くてまけちゃいそう。1」の2弾目です。1を見てから2を見ると、よけいおもしろくなっちゃうかもっの作品ですっ。

あれから3年。

あの日、高校3年だったあたしは、現在八タチを通り越した21歳になった。

「結伊っ」

「きひと稀人」

あたしたちはまだ恋人でいる。

高校生の時より落ち着いたカップルになったって、陽菜姉も言う。

「待った？」

「ううん。行こっ」

今日はあたしの誕生日。

稀人が遊園地に連れてってくれるって。

あたしの誕生日は、あたしたちのつき合いはじめた記念日でもあって、それで今日は特別な日。

稀人はカッコつけて、車高が低いスポーツカーを買ったんだって。

最近はそれによく乗せてもらうんだ。

今日だって、稀人は自慢げにハンドルを握ってる。

「結伊ももう21か。なんか早えーな」

道路を見つめながら、あたしと目を合わさないで言った言葉。

稀人の誕生日はあたしより5カ月も前の6月。

稀人はあたしより上だと思ってるところがあって、たまに上から視線なんだよね……

「うん。でもあたし、あんま実感しないなあ」

「俺も」

日曜日ってゆうのに、車が少ない高速道路。

大きいトラックがあたしたちの乗った車をぬかしていった。

「あのさ」

急にしんみりしはじめた稀人とこの空気。

「……どうしたの？」

車がパーキングエリアに入っていった。

稀人が言った「あのさ」の後から、たぶん1分以上たってる。車を止めた稀人は、じーっと前を見つめていた。

「稀人？」

よくわからない。

稀人がこっちを向く気配はないし、あたしもどうしたらいいのかわ

からない。

「結伊？」

「……ん？」

やつとしゃべった稀人に安心した。

それでもこつちを向かない稀人が怖かった。

「結伊はさ、俺のこと、好きだよな？」

なに……？

開いた窓から冷たい空気が流れてくる。

あたりまえでしょ。

あたしは稀人が好きだよ。

知ってるでしょ？

「ス……」

「俺っ」

あたしが言いかけたのを無視して、稀人が入ってきた。

「俺、結伊が嘘ついてんじゃないかって……思う」

え？

一度合った目を反^そらして、低い声で言った。
嘘……？

なんにもわからない。

あたしが稀人に嘘ついてるって言いたいんですよ？
でもっ、ついてないよ。

あたし、ほんとに稀人が好きだよ？

昔と変わらない、初々しい気持ちのまんまだし。
絶対。

「こえーよ」

窓の外を見ながら言った稀人の顔がわからない。

「最近結伊、態度冷てえし、笑ってねえし。」

俺は結伊のこと本気で考えてんのに、結伊はいつもより悲しい顔してっし」

え……？

「あたしはっ」

「言い訳なんて聞きたくねえよ。……俺と結伊のあいだに、なんかある気がすんだよ」

怖い顔でこっちを見た稀人は、いままでの笑顔と正反対で。
あたしはなんにもわからなかった。

冷たい態度なんてしてないし、楽しいときは笑ってる。

悲しい顔したのは……稀人が悲しそうだったからじゃなか。
あたしも本当に稀人が好き。

本当に、本当。

「なんで今更気づいてんだろうな。俺たち、3年前から相性悪かったのにな」

相性が悪かった……

じゃあ、なんで今までの時間が楽しかったの？
そんなこと言ってほしくなかった。

悲しくなるから。

目の前がどんどん滲^{にじ}んでゆくのがわかる。

稀人は再び車を走らせて、来た道を折り返していった。

「稀人……」

次々に流れる涙を一生懸命拭いながら、あたしは稀人の名前を呼んだ。

稀人はこっちを向かないまま、ずっと無言だった。

「あたしはっ……稀人のこと、好きっ……だよ」

しゃべるとよけい涙が出る。

たぶんちゃんと言えてないと思うけど、これがほんとの気持ちだから、絶対稀人に伝わるって信じてる。

「ねえ、ほんとだよ？あたしっ……あたしっ……」

もうしゃべれない。

止ろうとしない涙をあたしは恨んだ。

こんなんじや稀人の気持ちがわかんないでしょ？

あたしのこと好きって言ってくれてる稀人が、悲しい顔してるのなんか、見たくないでしょ？

「ねえ稀人……」

とうとう諦めかけて下を向いたあたし。

ずっとなにも言わない稀人がどんな気持ちなのか、わからない。なんか言ってよ……

「結伊」

やっとしゃべってくれた稀人。

一瞬あたしはなにかに救われた気がした。

「それがマジなら、よく考えろ」

え……？

「俺は結伊のこと好きって言うてんだよ？そんな泣くことかよ」

……あ。

あたしも稀人も、おんなじ気持ちなんだ。

「なんか、つらい思いさせてごめん」

下を向いた稀人。

あたしも……ごめんね。

「高速折り返しちゃったし、今日は近場で我慢できる？」

「うんっ、全然」

もとの雰囲気に戻った空気。

この空間が幸せに思えた。

「今日からずっと一緒だから、いつでも行けるしな」

……ずっと一緒？

今日から？

「はい」

あたしの手に、稀人がなにかを握らせた。
手を開いてみると、家の鍵が入っていた。

「これ……」

「新居の鍵」

え？

「おふくろから、結伊と上手くいくようにって、マンションもらった」

稀人のお母さんが？

「俺の両親、不動産関係の仕事してて、俺と結伊が暮らす用に、部屋もらってさ」

俺と結伊が暮らす用に……？
もしかして……

「同棲からでも、俺ともっかい、結婚前提でつき合えないか？」

うそ……

同棲……結婚……

え？

あたし……

「結伊？」

「あっ……はいっ……ぜひっ」

こんなこと、嘘だと思った。

信じられないよ。今も。

一瞬こっちを見た稀人は笑ってた。

涙なんかとつくに乾いてた。

あたしたち、やっと大人になったんだって、初めてわかった。

今日があたしたしの2回目のスタート。

いままで散々なことばっかだったけど、今はすっごい幸せなんだ。

稀人に出会えてよかった。

あたしが居てよかった。

この出会いはもう一生ないと思うから。

今日からでもまた、本気で生きよう。

（後書き）

こんにちわ。

作者の梓衣です（．．）

甘くて強くてまけちゃいそう。

シリーズ、ついに完結ですっ！！

みなさん応援ありがとうございましたっ

これからも梓衣の作品にご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2966k/>

甘くて強くてまけちゃいそう。 2

2011年1月16日05時03分発行